

「育ち合う心を求めてーことばを育む意味を考える」



講師 **肥後 功一** 氏

(島根大学教育学部教授)

講師プロフィール

肥後 功一(ひご こういち) 生年:1958年 出身:北九州市門司区 現住所:島根県松江市

職歴等:早稲田大学大学院文学研究科博士前期課程心理学専攻修了後、リハビリテーション病院や国立特殊教育総合研究所に勤務の後、1992年4月より島根大学教育学部に勤務。

2001年4月「心理臨床・教育相談室」を設置、室長を務める(2005年度まで)。

2003年4月教育学部心理・発達臨床講座 教授。

2006年4月より島根大学評議員、教育学部副学部長(教育戦略担当)、FD戦略センター長

専門分野:教育臨床心理学・発達臨床心理学

資格等:臨床心理士、中学校教諭1級普通免許状(社会)、養護学校教諭1級普通免許状

研究テーマ:教育(保育)におけるコミュニケーションとその障害 など

(大学・大学院での主な担当授業科目)

児童臨床心理学概説、教育臨床心理学概説、臨床教育相談論、臨床心理学特論

障がい児者臨床心理学特論 など

所属学会:日本心理臨床学会・日本発達心理学会・日本特殊教育学会

主な著書:

「通じ合うことの心理臨床 - 保育・教育のための臨床コミュニケーション論」(2003 同成社)

「改訂版 コミュニケーション障害の心理」(2000 同成社)

「社会での暮らしとコミュニケーション」(1993 明治図書出版 共編著)など

趣味など:

海釣りが好きでしたが、いつしか行く暇がまったく無くなりました。

園芸は畑、果樹など食べられるものしか作らなかったのですが、ここ数年バラの栽培が好きです。

子どもがみんな進学で家を離れて寂しくなったことと関係があるのでしょうか。同じ棘があっても

同居人よりバラの方がマシ...(失言)。

料理が好きで、和、洋、中華、お菓子(ケーキ中心)...と何でもやります。

中学生で挫折したピアノを弾きたいのですが、錆び付いた指はもう動きません。鍛え直す時間ありません。音楽への欲求はCD鑑賞でごまかしています。

暇があるときは陶磁器を中心に美術・工芸品を見て歩きます。もちろん手は出ません。「ほんとうは自分の所有品だが、置く場所も無いので、今は美術館やデパートに預けてある」という自己暗示をかけています。(ここのを専門を活かした人生って言うでしょうか...)

講演の要旨

新しい小学校学習指導要領が、今年度から全面実施となりました。これまでの「生きる力」が新しく捉えなおされるとともに、「言語力」の育成が重要な柱になっています。この機会に、その名も「ことばを育む会」において、<子どものことばを育てるとはどういうことなのか>について、原点にもどって考えてみることに深い意味を感じています。

「ことばを育む」ことの意味について、通級指導が始まる以前の難聴・言語障がい教育の歴史等も踏まえながら、私たちが今、どういう地点に立っているのかをお考えいただくため、そして二日目のシンポジウムに向けて、お互いが「合う」ことのできる話題提供になるよう努力したいと思っております。

講演の内容

皆さん、こんにちは。島根大学の肥後と申します。

神奈川県は横須賀市久里浜(国立特殊教育総合研究所 当時)というところから、島根県松江市(島根大学)に移りまして、今年でちょうど20周年です。久里浜から引っ越す際、車の後に乗っていた当時1才過ぎと4才前の娘が、20年経ちまして、二人とも大学生になって島根の地を出て行ってしまいました。今となっては、なぜ一緒に暮らしているのか、もはや分からなくなった私も夫婦が残されまして、大変厳しい毎日を送っております。やはり発達課題というものはいつの時代にも訪れるもので、私は私の課題に日々取り組んでいるところです。

私が島根県に来た平成4年頃といえば、ちょうど通級指導が制度として始まった頃でした。一方で不登校やいじめなどの問題も深刻化している状況がありました。こうしたことから、障がいの問題だけではなく、広く学校生活にうまくいかなさを感じている子どもたちを心の面から支援する専門家として、臨床心理士の養成コースを島根大学大学院教育学研究科に設置する仕事に取りかかりました。もちろんそのためには相談室を整備し、人を配置し、ということがありました。幸いにいいまいしょうか、これは皆さんもご存知の通り、その頃からいわゆる旧来の障がい種別ということでは収まらないさまざまな発達特性や生きにくさを抱えたお子さんへの教育支援が注目されるようになり、今日こうした発達障がいの子どもを含んだ特別支援教育の重要性が叫ばれるようになりました。これは学校の先生方だけではなく、臨床心理士にとっても非常に勉強が必要な領域です。私は島根に来て、直接には通級(難言教育)の場を離れてしまいましたが、結局、心理臨床の仕事ぐるっと回って、ここに帰ってきたような具合になります。今日はそういった私の原点 コミュニケーションとその障がいをめぐる考え方 というところに立ち返ってお話をしてみたいと思っております。

記念講演

育ち合う心を求めて ~ことばを育む意味を考える~

1. 合うことの不思議

まず今日の演題ですが、「育ち合う心」という具象に、「育つ」に「合う」が付いています。動詞の連用形に付く「合う」は複合語をつくる補助動詞とよばれますが、この「合う」が付くことの出来る動詞(話し合う、通じ合う、取り合う、殴り合う...など)は人と人とがやりとりをする可能性を持った動詞です。お互いに何かをするという相互性の意味が付け加えられ、人と人がやりとりをする、つまり「合う可能性に向かって開かれている」そういう人の動きです。コミュニケーションは簡単に言うと「合う可能性」のことです。それが満たされた時、そこに何らかの共有が生じて、コミュニケーションが成立するのです。

この「合う可能性の基盤」は、今日さまざまな研究によって、もともと一定程度、脳の中に用意されていると考えられています。ただその強さ弱さには個人差があり、また脳は可塑性(環境との相互作用によって柔軟に働きを変える可能性があること)の大きな器官でもあることから、環境の影響も受けながら、それぞれの人が個性的なコミュニケーション機能の土台を発達させていくと考えられています。コミュニケーションの重要な働きである「社会-情動的機能」(情動共有など、対人関係の基盤を形成している気持ちの通じ合いなど)は、もともと一定程度、脳の基盤をもっているのでしょうか。しかしその上に、環境や経験という大きな個人差要因が加わり(適応的かどうかは別にして)全体として非常に個性的なコミュニケーション機能が形成されます。そういう意味で、子どものコミュニケーションの力はもとより関係的(周囲の状況との関係で決まる)性質をもっているのです。

2. コミュニケーションの二つの側面

コミュニケーションには、先に述べた「社会-情動的機能」に加えて、もう一つの大切な働きがあります。それは正確な情報伝達を支えている機能で、ここではそれを「認知的機能」と呼んでおきます。次にこの二つの関係について考えてみましょう。

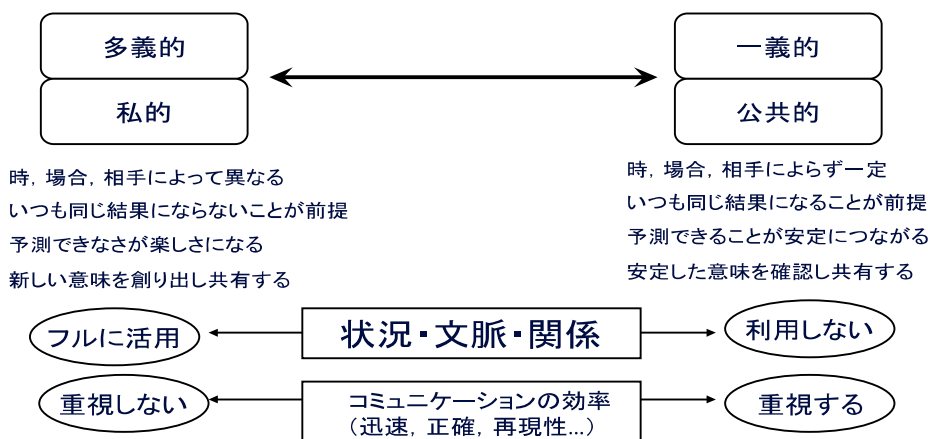
最近では高校入試の国語の問題にリスニングが取り入れられている地域がある、という話をみなさんはご存知でしょうか。最近の高校生は人の話を聴く力が育っておらず、それが高校での授業の難しさに結びついている、といった新聞記事も掲載されました。そこでリスニングを...というのですが、果たしてそれで人の話を聴く力がわかるのでしょうか。「人の話を聴く」には「人の話」を情報として認知処理する側面があります。「人の話」を情報として正確にキャッチし、要点を抽出し、間違いなく把握するという側面であり、これもコミュニケーションの大切な側面で、これはコミュニケーションの「認知的機能」の役割です。その際に重視されるのは、情報の「一義性」「再現性」「迅速性」です。いつ、どこで、誰が、どんなふうに...という状況や文脈に左右されずに「いつも同じことが正確

に伝わる」ことが大切です。コミュニケーションの認知的機能はそれを支えているもので、主にコミュニケーションの公共性を支えています。高校入試の国語リスニングは、こうした力を測っていることになるでしょう。

これに対して、先ほど述べたコミュニケーションの「社会-情動的機能」は、コミュニケーションの揺れ動く側面...すなわち「多義性」「相対性」「関係性」を支えています。時や場所や相手や状況によって、さっき通じたことが今度は通じない、さっきとは意味が変わってくる...コミュニケーションにはそういう揺れ動く側面があります。不安定ではありますが、これが機械的な繰り返しではない、人間らしいコミュニケーションの核の部分を作っています。「こうすれば必ず伝わる」といったシンプルな約束事やスキルを獲得することでは届きにくく、どうしても「失敗から学ぶ」「試行錯誤する」「自分なりのやり方で体得する」といった側面が強く、その人の人間的成長、あるいはその人らしさ(パーソナリティ)と一体化して初めて生きてくる...そういうタイプのスキルが求められる領域です。

コミュニケーションと記号

人と人の中に記号が共有されることをどう考えるか？



3. 揺れ動くコミュニケーションの力をつける

二つの機能はどちらもコミュニケーションを支える重要な機能ですが、学校生活を社会的対人関係の基礎トレーニングの場として捉えると、やはり揺れ動くコミュニケーションの力をつけていくことが大事だと思います。発達障がいのある子ども達は、多義的コミュニケ

ーションが苦手です。揺れ動くコミュニケーションは不得意なので、わかりやすいシンプルなルールを決め、まずはコミュニケーションを安定させていこうとする試みがよく行われます。たとえば予定表や絵カードなど視覚化したものを使って、目に見えない先のことや表現しづらい気持ちなどを、「こうなるよ」「こうすれば大

丈夫」と、目に見える形で具体的に教えていこうとする取組みがよく行われますね。そうした取組みによって、子ども達が具体的な対処方法をまずは身につけて、学校生活に不安を抱かなくても済むようにしてやることは大切なことでしょう。けれども敢えてその上で申し上げるのですが、そうした世界...記号的な約束事で仮に安定させている世界を、子ども達はいつか出て行かなければなりません。シンプルな記号的な取決めをスキルとして積み重ねても、現実社会の揺れ動くコミュニケーション世界に対応していくことは、おそらくむずかしいでしょう。さきほど見事な司会をされた彼ですが、この司会なんて、揺れ動くコミュニケーションの代表ですよ。時間がオーバーするかもしれない。途中で誰かいるはずの人がいないかもしれない...そんな不安定な状況で人前に立たねばなりません。

そうしたことに少しずつ慣れていく努力や試行錯誤の時間、それこそが学校教育の時代の宝です。学校教育に求められるのは「うまくいくこと」や「落ち着くこと」だけではありません。「うまくいかない」や「不安定」を安心してやれる!ということ、それこそが値打ちです。揺れ動く世界に対してその子らしい試行錯誤が許される時間...それが学校教育の時代なのです。ですから「こうすれば落ち着くでしょ。このカードを使えば大丈夫」というところで終わっちゃダメなんです。それで落ち着いたなら、今度はそれを止めてみる...作っては壊す...というところまでいって初めて学校教育の意味が出てくると思います。保護者のみなさんも、学校教育に「うまくいくこと」「子どもが安定すること」ばかりを求めてはいけません。子どもがその子なりに変化・成長・発達することのきっかけやエネルギーは、たいてい「うまくいかないこと」や「不安定」の中にあります。学校教育の時代に、本気で思っきり「うまくいかない」経験をし、本人も親も先生も友だちも、みんなでその「うまくいかなさ」を共有することは、ゴッソではない、本物のコミュニケーションの力を育てることにつながることでしょ。

このような揺れ動く状況や文脈、場や関係の中でのコミュニケーションを育てようとするには非常に高い専門性が要求されます。おそらくそれは、記号的でシンプルな約束事としてのコミュニケーションスキルを教えていくより、はるかにむずかしい課題だといえるでしょう。通級指導を担当される先生が、いつも揺れ動くものに向かって開かれていること、その子との間に偶然起こった瞬間を掴んで、その子とのコミュニケーションを開く力があるかどうかが大変なのです。コミュニケーション教育は「偶然をチャンスに変える」柔軟な姿勢や目線が必要です。そこから学び合い、育ち合う学校教育が生まれるのだと思います。

4. 団らんから育つもの

人の話を聞く力の中には、話に含まれている情報を認知的に処理する側面と、同時に送られてくる音声や表情などの複雑で多義的な成分「いわば話の「身体的な成分」を頭で理解するのではなくそれが身体に染みてきて、まるで自分の「話」のように身体で感じ取るという側面があります。後者の方をここでは社会-情動的機能(関係的理解)とよびました。そんなふうに入りの話が自分の中に入ってきて自分のことばとつながる経験をする、それが人の話を聴く、人の話と出会うことの楽しみです。コミュニケーションが育つということは、そのような「合う」楽しみを知ることでもあります。

人のことばと出会う(合う)楽しみが育つということは、「学ぶ力」を育てることであります。子ども達が学校というところに行き学んだ方がよい一番の理由は、多くの先生や友だちと出会い「話をする」の中から学ぶ、ということに大きな意味があるからです。話しことばだけではなく、本に書いてあることば(書きことば)と出会い、そのことばが自然に自分の中に入ってきて自分のことばになっていくということ、それが読書の楽しみです。そんなふうに入りのことばと出会い、つながり、それを自分のことばにしていく経験こそ、学習の力というものでしょう。

さらに人間というのは不思議な動物で、食物や水からエネルギーを得るだけではなく、入りのことばと出会い(合い)ことばからエネルギーを得ることがあります。みなさんも、落ち込んだときにわかってくれそうな人と話をしたり、好きな歌を聴いたりして、元気を回復することがあるでしょう。入りのことばとつながる力は、精神的なエネルギーを回復し立ち直る力でもあるのです。

コミュニケーションの力のうち、その核となる「入りのことばとつながる力」について、お話ししてきました。むずかしい話だと感じられたかもしれませんが、その力を育てるのは実は非常に簡単なんです。子ども達は入りのことばとつながる力を「団らん」というものの中で身につけていきます。団らん...それは話し手が誰か、聞き手が誰か、という役割がどうでもよくなるコミュニケーションのことです。私の話があなたの話になり、あなたの話がみんなの話になる、そのような「主語を忘れてみんなで楽しくおしゃべりの出来る時間」それが団らんです。人と一緒にいてなんとなくいい気持ちになれる、その場の空気に触れながら皆の中に溶け込んでいく...その積み重ねが、入りのことばとつながるコミュニケーションの力になっていくのでしょ。

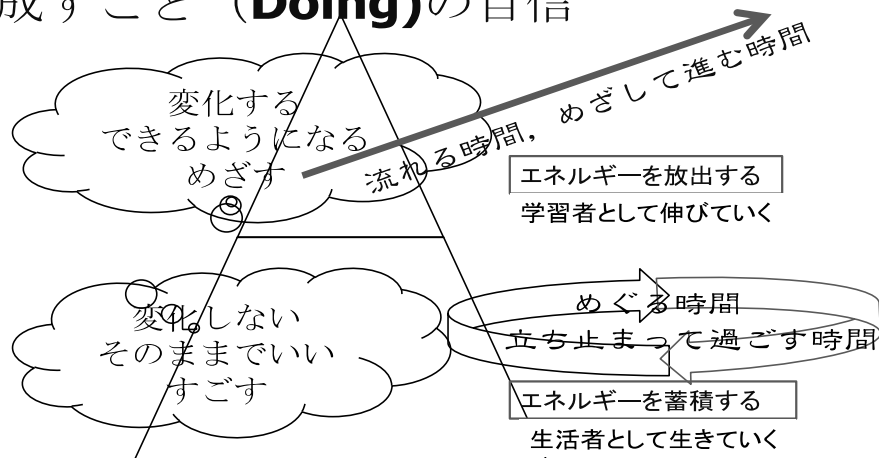
5. ことばを育む意味

ことばの獲得をコミュニケーションという視点から考えるとき重要なのは、おとなと子どもの間に「なぞられるなぞる」という関係が成立することです。一つのことを二人の人間が「いっしょに見る」というのは簡単なようでむずかしい、コミュニケーションの基本が含まれている現象です。ことばの獲得期において、おとなは子どもの見ているもの(まなざし)を「なぞる」ということをします。子どもがじっと犬を見ている様子に対してお母さんは「あら、犬さんだねえ、僕はわんわんっていうよ、けんちゃん、よろしくね」などと子どもに話しかけるでしょう。それが「なぞる」ということです。そんなふうに分が見ているものをなぞられた経験のある子どもは、今度、犬を見つけたとき、お母さんにそれを投げかける(教える)ということをしませぬ。そのとき、子どもはまだことばは出ませんが、「ああ、ああ」とか言って犬のいる方を指さしたり、犬を見てお母さんを見る、といったことをします。そのとき子どもの中では「ほらほら、あれがお母さんがこの前言った “でしょ?” という気持ちが育っています。この“でしょ?”と投げかける

気持ちの芽生えがコミュニケーションということの本質で、犬を“わんわん”ということばで言えることより重要なことです。

このように、ことばの発達で大切なのは、大人と子どもの関係の中で、ことばという記号が獲得されていくことです。ことばは「人との関係(対人関係の軸、社会-情動的機能の軸)」と「記号関係(知的、認知的機能の軸)」とが交差するするところに成立します。クリニックやことばの教室で「もうずいぶん通うけど、ことばが増えていきません」というご質問を受けることがありますが、そのとき私が最初にお尋ねしたいことがあります。それは「その子は、そこに通うのを(その先生に会うことを)楽しみにしていますか?」ということです。子どもが自分の見つけたものを「ねえ、見て見て!」と投げかけたい気持ちになる人でないと、その子のことばを育てることはできません。そんな子どもとの関係が作れること、それは思ったほど簡単なことではないのですが、その関係を作る側の技術がまずは問われるところでしょう。

成すこと (Doing) の自信



在ること (Being) の自信

6. 子どもを支える二つの自信

障がいということにかかわらず、子どもが育っていくとき(いや本当は私たち大人にとっても)自分を支える自信というものは必要です。その自信には二つのものがある、というお話をいたします。

一つは、普通に考えられるもので、何か新しいことが出来るようになったり、身についたりすることからくる自信で、これを Doing の自信(成すことの自信)とよびます。子どもに新しい知識や技術が身につくこと

は非常に重要なことで、学校教育はこの自信を育ててやることを主な目的にしているといってもよいでしょう。それを育くむのは「父性」的な力です。父性の力は(男性だけでなく女性にもあるものですが)簡単にいうと「切り離す力、いまここを離れる力」ですが、後でもう少し詳しくお話しします。

もう一つの自信は、存在すること、自分がここに居るということそのものの自信で、これを Being の自信(在ることの自信)とよびます。これは普段は気づか

ないのですが、自分の存在が脅かされたとき、あるいは居場所を失いそうな時に、そのことの大切さに気づきます。例えば、学年が変わった時、学校が変わった時、担任が変わった時...そういう帰属が変わった時、子どもは不安定になります。そうした不安定は、子どもが成長するきっかけにもなるのですが、同時に大きな心理的危機でもあるでしょう。大人も職場や配属が変わったとき、同じことが言えますね。そこに新たな自分の居場所があるのか、新たな場所 みんなに認められ受け入れられていると感じられるかどうか...そうした Being の自信が持てないときには、どんなに能力がある人でも、それを発揮できなくなります。私たちは Being の自信に支えられて初めて Doing の力を発揮できるのです。この Being の自信を育むのは「母性」的な力です。

母性の力(これも女性だけではなく男性にもあるのですが)あるいはその基本的なメッセージは「私にくっついて一つになれば、おまえは満たされる...いつでも、いくらでも、好きなだけエネルギーをあげる...だから私と一つになってここに居なさい」です。これに対して先に述べた父性の力は「ここを離れて遠くに行きなさい...お前は自分の道を行きなさい」です。子どもが育つためには、両方のバランスが必要です。子どもの発達に応じて Doing と Being の二つの自信を、父性的 / 母性的かかわりわりによって育ててやるのが大事です。

Doing の自信は、できるようになること、つまり「変わっていく」「めざす」ということを重視します。これに対して Being の自信は「変わらないこと(そのままでもいい)」「すこすこ」ことを重視します。私たちの時代が少しおろそかにしてきたこと...それは存在すること、変わらずに在るということです。目標を決めて、できるだけ直線的に、右肩上がりに変わっていくこと、めざすことをよしとして時代は進んできました。しかし、朝昼晩また朝昼晩...と廻る時間、それがまた春夏秋冬春夏...と巡る季節...そんな中でお互いが「変わらずに在ること(Being)」を大切にすることの価値が、いま見直されようとしています。もちろんどんなに変わらずに在ろうとしても、時は流れ、私たちは次第に歳をとっていきます。だからこそ、今日も変わらずに会えてよかったね、明日もまた変わらずに会おうね...という関係を大切にしていくことに、コミュニケーションの基盤を求めなければならないのではないのでしょうか。そしてまた、その「変わらない関係」「Being に基礎を置く関係」の上で、初めて子どもは変わっていきけるのだと思います。子どもに変わらなさいという前に、その子が存在することをどれだけ大事にしているか、子どもが安心して変わっていくための「変わらない場」を私たちはきちんと安定して提供できているのか、そのことを問うてみたいと思います。

交流会での前置きになったかどうか分かりませんが、こういったコミュニケーション、この育ち合う関係ということ、少し様々な形でお考え頂けたらいいのではないかと思います。

まとめに替えて

1. シンポジウムから

シンポジウムから、私の勉強になったことを3点程申し上げます。

一つは、障がい固定観念で捉えないということ。津田さんのお話の中で、聴覚障がいのお子さんが合唱をしたいと言い出したお話がありました。子どもの力は、ことばの発達に限らず、私たちが普通に想像していることを軽く越えていくところがあります。

障がいだから、という枠にはめて見ているとその子の新しい可能性を引き出せません。障がいだけではなく、「その子」を固定観念(今までの見方の延長)で捉えないということも大切です。家で見ている我が子の姿が、色々な場に出て行くことで「えっ、こんな事も出来るの?」と気づかされる事もあるはず。親の会のキャンプなどもそのよい機会でしょう。さらに私たち専門家にとっては、親御さんを固定観念で捉えないということも心しなければなりません。障がいのある子を育てる大変さという固定観念は、ある程度本当のことです。当人当事者にしかわからないものでもありますが、しかしやはり親さんもさまざまな個性をもっており、打たれ強さ弱さもさまざまです。また親も子どもによってどんどん成長され、当然のことですが、いつまでも出会ったときのその方のみではありません。

二つ目は私の専門であるカウンセリングに通じる話でもあり、昨日からテーマにしてきた「合う」ということに関連する話でもあります。津田さんのお嬢さんが行き詰まったとき、さあ自分の出番かなと張り切るお母さんを尻目に、小学校中学校のときに通級で指導を受けた妹尾先生とお話をしたというエピソードです。子どもは子どもなりに「自分が今、出合うべきもの」が分かっているということ、それが何であるかは具体的にはわからないのだけれど、それと「出会わせてくれそうな人に会いたがる」ということなんです。萩野さんも同様の話をされました。子どもが学校に行きたくないなら、今は無理矢理行かせなくてもいいじゃないか...それをいろんな人に言われてきたはずですが、学校に何とか来させなさいと一番言ってもいいはずの教頭先生にそう言われて納得できた、というお話。あることばが心に落ちる、つまり「ことばと出会う」には、やはり「然るべきタイミングで然るべき人の口から」ということはあるなあとと思います。

三つ目は「合う」ということに関連して通級指導教

室の役割についてです。通級指導について昔からよく出てくる話なのですが、ゲームやたこ焼きやランボリン...子どもは楽しみにして通い始めたのはよいが、それで「いつ本当の指導が始まるの？」ということです。心理学などでは、まず最初に子どもとの信頼関係を結んでから...という意味でラポールということばを使います。たとえばきちんとラポールが取れてから検査や治療や訓練をしましょう、というふうに使います。こうした見方では「子どもと信頼関係を結ぶ」ことは、検査や治療や訓練を行うという主目的のための「手段」と考えられています。しかしそれは大きな間違いで、「子どもと信頼関係を結ぶ」ことは教育の最終的な目標なんです。ここではゆったりした気持ちで、普段は否定されがちな素顔の自分を出してもいいんだと思えるようになること、それが何より大切です。昨日、私はそのことを Being(在ること)の自信という語でお話しました。通級指導教室はフィッティングの場所です。フィッティングとは「合う・合わせる」という意味です。つまり通級指導は、その子が「自分らしく生きる」「Beingの自信をもつ」ためにどんな環境・人間関係・活動・学習・教材>を必要としているのか、それを的確につかみ、その子の個性に合わせてフィッティングしていく、そういう非常に高い専門性を要する指導だと私は考えます。

以上、シンポジウムのまとめとして3つのことをお話ししましたが、簡単にあと2つほどのことを付け加えて、まとめのお話を終えたいと思います。

2. 自己肯定感ということ

「ことば」の第254号に、コメントを書かせて頂いた折、「この続きは岡山で...」と書いて終わっていますのでそのことを。自尊心、自己肯定感、自己有用感、自己効力感、自尊心...こうしたことばが教育現場をにぎわせています。現代の日本の子どもたちは、こうしたものが低いという指摘があって、学校教育現場ではこれらを高める取り組みが行われてきました。たとえば学校生活の中でなるべく認める場面、いいところを見つけ褒める場面を増やし、そのことで意欲や自信を持たせようといった取り組みです。実際そういう場面を増やすと、「自分のことをいいと思える」「自分にはよいところがあると感じる」といった質問項目の得点が、当初より高くなるということです。

けれども一方で、私達の時代は「自己」というものにとらわれ、そこからなかなか抜け出せないという「自己の病理」の時代でもあります。「自分」への強いとらわれ(つまり自己愛)から、自信過剰と自己否定といった両極に引き裂かれやすく、人からの評価に

一喜一憂し、傷つきやすく、両極端で中間がない...
そういう傾向が増強されがちです。

そんな時「ことば」254号のコメントを書くために、山口さんのお話を読みました。この中に「おかげさまで、世の中を嫌いにならないで済んでいます。」とありました。たぶん何気なくお書きになった一言だと思えますが、私はとても参考になりました。今の教育の中で「自己肯定感」とか「自尊感情」といったものは、「自分自身」に向けて考えられています。「自分で自分のことをいいと思える」「何かができる自分をいいと思える」ことが重視されようとしている、その点が少し違っているのではないかと気づかされました。本当の意味で「高い自己肯定感」の持ち主は「世の中を嫌いにならない、世の中を好きでいられる」のではないのでしょうか。自分の生きているこの世界、この地域、この毎日、自分の周囲の人々、家族、友だち、学校、先生...そうしたものを「好きだ」と肯定的に感じているはずですが、それはBeingが安定している子どもにしかできないことです。その子がその子らしく豊かに「世界と出会い、人々と出会う」、つまり「合うこと」を育てる事が、一生を幸せに生きていく財産になるのではないかと思います。

3. 親の会のこと

昨日のお話の中で試行錯誤の大切さ、ということを申し上げました。実はその試行錯誤の集積というのが、親の会の本質ではないでしょうか。それぞれの親ごさんが我が子の為に試行錯誤が集まっているのが親の会で、それは何にも代え難いすばらしい財産です。また昨日の交流会では団らんの話が出ていました。どなたかが、親の会というのは2~3人の茶話会が原点なんですよ、と話しておられました。私はかつて国立特研にいた時代、大石益男先生が「キャンプや相談会にたくさん人が来たから成功だなどと考えるはいけません。一人や二人の少人数でも来てくださる場を作ることが大切だ」とよくおっしゃっていたことを思い出します。そこに団らんがあるので、シンポジウムを拝聴しながら、親の会の基本は子育てをする親御さんのBeingを支える場なのだと思えて気づかされました。子どものBeingを支えるには、親のBeingが支えられていないといけませんね。

試行錯誤の集積も、団らんも、親の会の中にもともとその本質としてあるものです。そのことを確かめさせていただいて、私の話を終わりにいたします。2日間にわたりお付き合いくださいましたことに心より感謝申し上げます。